

ヌース・ポイエーティコスという問題：ブレンターノ解釈の検討を通じて

酒井，健太郎
九州国際大学法学部法律学科：准教授

<https://doi.org/10.15017/7392673>

出版情報：哲学論文集. 61, pp.47-72, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン：
権利関係：



ヌース・ポイエーティコスという問題

―ブレンターノ解釈の検討を通じて―

酒 井 健 太 朗

はじめ^①

哲学者アリストテレスの使用する概念には、その内実の不明瞭なものが多い。「質料 (ἵλη)」や「形相 (εἶδος)」はもちろんのこと、「第一原理 (πρῶτη ἀρχή)」や「幸福 (εὐδαιμονία)」など枚挙にいとまがない。そのような諸概念の中でも最も難解なものとして知られるのが、本シンポジウムのテーマおよび本稿のタイトルに含まれる「ヌース・ポイエーティコス (νοῦς ποιητικός)」である。「ヌース・ポイエーティコス」は、アリストテレスが用いた言葉ではない (Shields 2016: 312)。しかしこの言葉が示す概念は、哲学史における巨大な問題の一つとして扱われてきた。つまり、この概念は難解なだけでなく、解明に取り組むべき重要なものでもあるのだ。

そう聞いた人は、ヌース・ポイエーティコスという概念の内実について知りたくなるだろう。そして研究書や解釈書を紐解いた途端、その人は百家争鳴の騒ぎに巻き込まれることになる。この概念に関する確定的な解釈など何も存在しない。

なぜそのようなことになるのか。この概念の「大元」である『魂について』第三卷第五章が短すぎることは原因の一つだろう。また、このテキストの記述が（アリストテレスという哲学者においてはいつものこととはいえ）曖昧なことも事態を悪化させている。さらに、『自然学』や『形而上学』等のアリストテレスの他の主張著作で登場する、「不動の動者（κίνητον ἀκίνητον）」や「神（θεός）」のような重要概念との関係が明確でないことも理由として挙げられる。つまり、ヌース・ポイエーティコスという概念の内実を知るための障害物があまりにも多すぎるのである。古典的な哲学文献の解釈とはすべてそのような要素を含んでいるかもしれないが、それでも、ヌース・ポイエーティコスおよび『魂について』第三卷第五章に関してはその難解さが群を抜いていることを多くの人々が認めている（e.g. Theiler 1959: 142）。

以上の点を踏まえたうえで、本稿ではヌース・ポイエーティコスの内実を問うことを直接の目的としない（考察の行きがかり上、ある程度の解明はなされる）。むしろ、ヌース・ポイエーティコスという概念が示す問題がどのようなものであるかということをも、アリストテレスのテキストに忠実に明確化することを目指す。その際の水先人となるのが、フランツ・プレントナーの『アリストテレスの心理学——とりわけ、彼のヌース・ポイエーティコスの教説について』（1967）（以下、『アリストテレスの心理学』と表記）である。というのも、彼のこの著作は、ヌース・ポイエーティコスという問題そのものの布置を浮かび上がらせるものであるという点で、本稿と問題意識を共有しているからである。ただしプレントナーの著作には、彼自身の哲学観（あるいは心理学観）が多分に反映されている。優れた哲学的業績としてのみこの著作を扱う場合には、この点はそれほど問題とならない。しかし、この著作が含まざるをえない「アリストテレス解釈」という点では、プレントナーの解釈がアリストテレスのテキスト（およびそこでの主張）と整合性が取れているか否かは問題となりうる。そして私の認識では、プレントナーの解釈には「無理」がある。それを適切に理解するため、水先区を出てアリストテレスのテキストという外海に飛び出していく必要がある。

本稿の構成は以下になる。第一節では、ヌース・ポイエーティコスに関わる『魂について』第三卷第五章のテクス

トを確認したうえで、ブレンターノによるそのテキストの解釈を参照する。第二節では、ブレンターノの包括的な解釈の中でも第三巻第五章に五つの「知性」を読み込むという点に焦点を当て、その問題点を指摘することで彼の解釈を採用することが難しいと主張する。第三節では、『魂について』第一巻第二章および第三巻第四章を参照することで、アリストテレスがアナクサゴラスの知性に関する説明をどのように用いているか確認する。アリストテレスが、アナクサゴラスの議論の何を受け入れ、何を拒否しているのかを検討することで、アリストテレスの哲学的主張、ひいてはヌース・ポイエーティコスが必要とされた理由の一つが浮き彫りとなる。第四節では、ブレンターノによる「心理学が論理学を基礎づける」という主張を参照し、それを『分析論後書』と『魂について』のテキストから裏付ける。第五節では、私自身のヌース・ポイエーティコス理解を示すことで、この概念が必要とされたもう一つの理由を明確化する。

一、『魂について』第三巻第五章のテキストとブレンターノによる解釈

本節では、ヌース・ポイエーティコスが論じられる『魂について』第三巻第五章のテキストをブレンターノの解釈を参照しながら確認する。

まずは問題のテキストである。『魂について』第三巻第五章は、その直前の第三巻第四章で開始された知性についての考察の続きである。² このテキストについての私自身の解釈は次節以降で徐々に示されていくことになる。ここでは、そのための足がかりとしてブレンターノの解釈を確認したい。ただし、その解釈のすべてを確認する余裕はないので（また、本シンポジウムの別の提題者の議論との重複も予想されるので）、ここでは、このテキストに含まれる「知性」についての彼の理解を本節で参照し、それを次節で反駁するにとどめる。³ ブレンターノによれば、ここには以下の五種類の「知性」が含まれている（『魂について』第三巻第五章からの引用では、このそれぞれが適用される箇所に以下の α 、 ε の語句を挿入した）。

- α ∴ ヌース・デユナメイ（可能態にある知性）
- β ∴ ヌース・ポイエーティコス（作用する知性）
- γ ∴ 神的ヌース（cf. Brentano 1867: 182-183）
- δ ∴ 魂のヌースの部分（cf. Brentano 1867: 204-206）
- ε ∴ ヌース・パテーティコス（表象の働き）（cf. Brentano 1867: 208-210）

以下が、『魂について』第三巻第五章のテクストである。

さて、自然の全体において、一方では何かあるものがそれぞれの〈類〉にとつての素材であるが（またそれは、可能状態においてその〈類〉に属するもののすべてである）、他方ではそれとは異なるものが、すべてのものを生み出すがゆえに、原因つまり作用し生み出す能力をそなえたものであり、後者は前者に対して、技術が素材に対するような関係にある。——このような事情にある以上、ちょうどそれと同じように、魂のうちにもそのような区別が成立していることは必然である。実際、一方では、それがすべてのものになるといふことのゆえに、素材に相当する知性「α」が存在し、他方では、それがすべてのものに作用し生み出すがゆえに、原因に相当する知性「β」が存在する。後者は、ちょうど光に比せられるような意味での、ある種の性的状態である。というのも、光もまた、ある意味で、可能状態にある色に作用して活動実現状態にある色にするからである。

そしてこの知性「β」は、離在し、作用を受けず、混交せず純粹であり、その本質的あり方において活動実現状態にある。というのも、作用するものは作用を受けるものよりも、また始原はその素材よりも、つねにより高貴だからである。また、活動実現状態にある知識は、その対象となる事物・事象と同一である。ただし可能状態にある知識は、一個

人においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない。またこの知性「 γ 」は、あるときに知性認識し、あるときには知性認識しない、ということはない。

そしてこの知性「 δ 」は、分離されて存在し、まさにそれであるところのものであり、それ以外ではない。そしてこれだけが、不死であり永遠である。しかしわれわれが記憶を欠いているのは、これ (τοῦτο) 「 α 」 「 β 」は確かに作用を受けないが、作用を受けうる知性「 ε 」が可滅的であるからである。そして、これ (τοῦτο) 「 ε 」なくしては何も知性認識することはないのである。(III 5, 430a10-25)⁽⁴⁾

ブレンターノは、 α が「二重」の作用を受けると論じる (Brentano 1867: 163)⁽⁵⁾。可知的表象を含む ε が α に作用することになるが、感性的部分に含まれる前者が知性的部分である後者にどう作用するかが問題となる。そこで、「無意識」と理解された β の出番である (c. s. Brentano 1867: 73)。 β は ε を「磁石がやすり屑を自分の方に持ち上げ、それからこの屑に触れられる」ような仕方では α の方へ惹きつける (Brentano 1867: 164)。それゆえ、 α は ε から作用を受けると同時に、 β から「間接的」にも作用を受けることになる (Brentano 1867: 221)。この α と β は δ として離存性・永遠性・不死性を有する (c. Brentano 1867: 204-206)。というのも、それは人間が胎児のときに神によって付与されるものだからである (Brentano 1867: 197-202)。

二. ブレンターノ解釈の査定

前節では、『魂について』第三巻第五章のテキストと、それに関するブレンターノの解釈を簡単に確認した。本節では、このブレンターノによる解釈がアリストテレス解釈として妥当なものか否かを検討する。

管見では、ブレンターノの解釈には少なくとも以下の二つの問題がある。第一に、「ただし可能状態にある知識は、一個人においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない。またこの知性は、あるときに知性認識し、あるときには知性認識しない、ということはない」というテキストが γ （神的ヌース）について述べているというブレンターノの主張は擁護が難しい。ブレンターノはこの引用の前半部分「ただし可能状態にある知識は、一個人においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない」を、他の箇所（III 6, 430n23, III 7, 431a24）と関連づけながら、神的ヌースを要求するのだと理解している（Brentano 1867: 183, nn. 205-206）。しかし先立つ現実的知性として β （ヌース・ポイエーティコス）とは別の、神的ヌースを必ずしも想定せずともよい。というのも、 β が「魂のうちに」存在する人間的なものでありながら、常に思考し続ける神的なものでもあるという、いわば「半神半人的解釈」の可能性もあるからである。また、先立つ現実的知性として、神的ヌースではなく、たとえば生徒を教える際の教師のような別の個人の知性がここで想定されていると考えることも不可能ではない。

さらに、ブレンターノは『形而上学』Z巻第七章〜第九章を参照しつつ、 γ がなければ人間の認識や心身の結合が偶然的なものになると主張する（Brentano 1867: 183-188）。彼の理解では、それゆえに『魂について』第三巻第五章で γ に言及する必然性がある（Brentano 1867: 188-189）。しかし、その直接の根拠となる『魂について』のテキストが提示されるわけではない。また、そもそもこの主張を受け入れれば、逆に人間の認識から偶然的なものが排除されてしまうのではないだろうか。[……]われわれの思考内容（Gedanke）の発生が単なる偶然の所業であるというのは不都合な、いや笑うべきでさえある想定」だというブレンターノの見解（Brentano 1867: 187）は、アリストテレスの認識論をかえって質しいものとするように思われる。それゆえ、仮に神と知性の関係に関するブレンターノの理解が正しいとしても、『魂について』第三巻第五章の中に γ を読み込むことはできない。

第二に、 ε （ヌース・パターティコス）が表象の働きであると断定することも難しい。ブレンターノがそう解するのは、

知性が作用を受けないという特徴を持ち、 ε が「可減的」だと述べられているからである。しかし、ブレンターノ自身も認めるように、彼が ε と区別するところの α （ヌース・デュナメイ）も作用を受けないわけではない（Brentano 1867:130-131）。『魂について』第一巻第四章では知性が作用を受けないと一見述べられているように思われるが、ここでは「酩酊や病氣」という例から分かる通り身体的作用の方が想定されている（I 4, 408a23-24）。もちろん、 β ではない α も身体的作用を受けることはないだろう。また、同書第三巻第四章では「作用を受けて特定の感受状態にあるものではない」と述べられるが、これも感受状態にない、という方に力点があり作用を受けないと端的に言われているわけではない（III 4, 429a15）。

また、たしかに先の第一巻第四章では知性が減びないと言われているため（I 4, 408b18-29）、 ε を表象の働きと解したくなるかもしれない。⁶ただその箇所では「思われる」や「見える」、「おそらく」というように「断定を避ける表現」（中畑 2014: 47, n. 13）が多用されている。同様に、ブレンターノが ε 解釈の際に根拠として提示する（Brentano 1867: 208-209）別のテクストにおいても「表象の働き」が「一種の知性認識（ $\nu\acute{o}\eta\sigma\iota\varsigma$ ）である」と想定するならば」と一定の留保をつけて述べられている（III 10, 433a9-10）。あるいは、ここで減びないと言われているのは神性と接続される知性であり、 β のことだけが想定されていると考えることもできる。さらに、可減的であるということを「ある時に保持していた思维的形相を失うということ」であることを意味すると解釈することで、「思惟する対象を変える前でも後でも存続している」という α の特徴と整合的に理解することも不可能ではない（松浦 2019: 41, n. 13）。それゆえ、 ε が表象の働きを意味するという解釈には決定打となるようなテクスト上の証拠が存在しないのである。むしろ Wedin が述べるように、『魂について』第三巻第三章では「知性と表象の働きの同定」が、第三巻第八章では「思考が表象内容であること」が認められないことから、ブレンターノの解釈はこのテクストの文脈にまったく合致しないものである可能性が高い（Wedin 1988: 184）。

人の心に無意識の領域が存在するということは、『アリストテレスの心理学』を執筆した段階でのブレンターノの哲学的主張であろう。それを最古の心理学のテクストである『魂について』のヌース・ポイエーティコスの議論に読み込むことは哲

学的（あるいは哲学的的）に魅力のある戦略である。しかし、その理解に基づいたテキスト解釈は有無を言わせないほど説得的なものでなかった。少なくともそれは、現代の諸解釈（e.g. Polansky 2007, Shields 2016）よりも尊重されるべき積極的な理由を持ち合わせてはいないだろう。彼の無意識解釈が現在ほとんど参照されないのは、それが数ある魅力的な解釈の一つにすぎないからだと思われる⁷。

三 アナクサゴラスとアリストテレスの知性論

前節では、ヌース・ポイエーティコスの内実に関するブレンターノの解釈を受け入れづらいことが示された。しかし、彼がヌース・ポイエーティコスという概念が必要とされる文脈を哲学的サーベイに基づき真剣に検討していたことは事実であり、この問題意識に関しては私も賛同する。本節では、ヌース・ポイエーティコスという問題が位置づけられる文脈について、ブレンターノが示唆するだけではつきりと取り上げないアナクサゴラスの議論とそれに対するアリストテレスの態度を検討する。

ブレンターノは『アリストテレスの心理学』の「附論」にて、アリストテレスにおいて神が目的因であるだけでなく起動因としても理解されるべきことを説明する。彼がアナクサゴラスについて主に触れるのはこの箇所であり、ブレンターノによれば、アナクサゴラスにとって神は原理Ⅱ起動因であり、アリストテレス自身もそのような彼の説を好意的に紹介している（Brentano 1867: 235-236）。しかし、アリストテレスは本稿により関係する重要な箇所でアナクサゴラスとその説に触れている。それは、『魂について』第一巻第二章と第三巻第四章に含まれる。

まずは第一巻第二章を参照しよう。魂に関する先行研究を通覧するこの章では、「……」すべての論者が、魂をいわば次の三つの特質によって定義している。すなわち、動（運動変化）、感覚、非物体性である。そしてこれらの特質はそれぞれ、

各論者の想定する諸々の始原にまで遡って関係づけられる」と述べられているとおり (I 2, 405b11-13)、「このような事柄に関する哲学者たちの諸見解が参照される。重要となるのは「似たものは似たものによって知られる」という魂の規定が哲学者たちの見解から抽出された後 (I 2, 405b15)、その例外としてアナクサゴラスの主張が参照されていることである。魂が似たものを似たものによって知るとすれば、知るものと知られるものの間には何かしら共通のものが含まれていなければならない。実際、初期ギリシアの哲学者たちは、「一つの基本要素」や「複数の基本要素」を、魂(知るもの)と世界(知られるもの)が共有していると考えていた (I 2, 405b11-19)。アナクサゴラスはこのような人々と異なり、「作用を受けない」という性質と「他のものと共通なものを持たない」という性質を知性に帰している (I 2, 405b19-21)。ただし、そのような見解に基づいた場合、知性がどのように認識を行うことができるのかは不明瞭である (I 2, 405b21-23)。アリストテレスはおそらく、アナクサゴラスの知性論を下敷きにしたうえで、その知性がどのように認識論で機能しているのかを明確化するというモチベーションを有していたのではないだろうか。

この問題に対するアリストテレスの解答は『魂について』第三巻第四章で示されるが、それを見る前に次のことを確認しておこう。彼は、アナクサゴラスの理解では知性は「他のものと共通なものを持たない」という特徴を持っているために作用を受けることができないが、知性が認識するという目的を果たすためには「何らかの作用を受ける」のなければならないと主張する (III 4, 429b23-26)⁽⁸⁾。そのため、アナクサゴラス的な知性は知性認識を行うことができる。「作用を受ける」という知性の規定は、「何らかの作用を受ける」という慎重な言葉遣いからも理解されるように、単純なものではない。しかし制限のうえではいえ、知性はある意味で作用を受けるとアリストテレスが考えていたことは事実である。他方、彼にとつては、作用を受けないものであるという知性の特徴も救わねばならないものだった。知性が何らかの意味で作用を受けるとすれば、それに作用するものが必要となる。この作用するものは作用を受けることがなく、作用を受けるものよりも「より高貴」なものだろう (III 5, 430a18-19)。そうすると、それは少なくとも同じ知性でなければならぬ。このように、アリス

トテレスはアナクサゴラスの議論から、ヌース・ポイエーティコスの必要性を取り出しているとも言える。

さて、アナクサゴラス的な知性が知性認識を行うことができないという問題に、アリストテレスはどう答えているのだろうか。『魂について』第三巻第四章では、アナクサゴラスの主張が、知性は「すべての対象を知性認識する」ために「混交していないもの」でなければならないというものであると説明されている（III 4, 429a18-20）。アリストテレスはこの条件を満たすために、可能には様々なものでありうるが、それは現実的にはいかなるものでもないという特徴を知性に付与したのである（III 4, 429a22-24）。これは後ほど「終極実現状態としてはそのなかに何一つ書き記されていない書板の状態に相当する」と説明されることになる（III 4, 430a1-2）。それはともかく、当然、「特定の性質」が付与されてしまう「身体」と知性は切り離されなければならないし、それゆえに知性の「特定の器官」も存在しない（III 4, 429a24-27）。

以上のように、アナクサゴラスの議論から、アリストテレスは作用を受ける知性と作用する知性の必要性とそれらの特徴を引き出している。⁽⁹⁾ 言い換えれば、アリストテレスはアナクサゴラスの議論をいわば跳躍台として、自身の知性論を構築しているのである。しかし、アナクサゴラスの知性論に対する、アリストテレスの以上のような批判的検討は妥当なものだろうか。ここでアリストテレスが参照していると思われるアナクサゴラスの見解を、残されているその断片から引用しよう（中畑 2014: 147, n. 2）。

他のものどもはすべてのものの部分を分け持っているが、しかし知性は無限にして自律支配的であり、いかなる事物とも混じり合わず（*μεικνκτα οὐδὲν ἄμικτα*）、単独にそれ自体として独立自存している。なぜなら、もし独立自存しないで何か他のものと混じり合っているとすれば、一旦何ものかと混じり合った以上は、あらゆる事物を分け持つことになるからである。なぜなら、すでに以前のところで「……」わたしが語ったように、すべてのものにすべてのものの部分が含まれているからである。そして、一緒に混じり合ったものどもが知性を妨げ、したがってそれは、単独に独立

自存している場合に行なっていたのと同じように、事物を支配すること (krateiv) が何らできないことになるであろう。なぜなら、知性はすべての事物のうちで最も軽微にして最も純粋なものであり、すべてのものについてのすべての知識 (epistēmē) を掌握し、最大の力を有しているのである。また、魂 (のみ) は備えているものたちについても、より大きなものもより小さなものも、すべてを知性が支配している。[……] (DK 59B12=LM D27)

先に述べた通り、アリストテレスは、アナクサゴラスによる作用を受けないものとしての知性の規定について、知性が知性認識を行うためには何らかの仕方で作用を受けることが必要であるという観点から批判していた⁽¹⁰⁾。しかし、ここでの「作用を受ける (protychav)」あるいは「作用する (protychiv)」という言葉遣いはアリストテレスのものであり、アナクサゴラスはそのような言葉を用いていないということには注意する必要がある (cf. Carter 2019: 10)。アナクサゴラスはあくまでも、知性が「混じり合わず」そのゆえに「すべてを」[……]「支配」できると述べているだけであり、その意味で彼の議論に問題はない。なにか問題が存在するように見えるのであれば、その原因はアリストテレスによるパラフレーズにある。

アリストテレスはなぜこのようなパラフレーズを行なったのか。もちろん、知性論の創始者としてのアナクサゴラスを尊重しつつも、その議論の不徹底さを救い、自身の認識論に応用するためであろう (cf. 1.2, 405b19-23)⁽¹¹⁾。これをより具体的に述べよう。アリストテレスにとって知性は感覚とある程度までは類比的に捉えられるものであり、その観点から知性も感覚と同じく何らかの仕方で作用を受けるものでなければならぬ (III 4, 429a13-15)⁽¹²⁾。また、「混じり合わない」という規定からは「可能態」として知性を捉えるという可能性が生じる。アリストテレスはこのように、自身の認識論の構築に、アナクサゴラスの議論を様々な仕方で利用しているのである。

本稿の目的にとって重要な点は以下のものである。知性が作用を受けることと可能態であることを整合的に捉えるには、可能態の対である現実態としての知性が必要となる。つまり、アリストテレスのパラフレーズには、彼の哲学観が大きな影

響を与えている。そしてそれは、前節で見た通りブレンターノも共有するものである。ブレンターノがアリストテレスの議論を自らの哲学観に引き付けすぎたように、アリストテレス自身もまたアナクサゴラスの主張を歪曲している。もちろん、正しく理解していないからといって、それが哲学的に無価値だというわけではない。ブレンターノの無意識論も、アリストテレスの知性論も、それ自体として重要な哲学的意義を有しているだろう。

四．論理学を基礎づける心理学

前節では、アナクサゴラスの議論をアリストテレスがいかに使用したかを示した。次節にてヌース・ポイエーティコスに関する私自身の解釈を提示する準備として、本節ではアリストテレスにおける論理学と心理学の関係について論じる。

ここでまず参照すべきは、やはりブレンターノの証言である。彼は『アリストテレスの心理学』の冒頭近くにおいて、いわゆる「論理学 (Logik)」と「心理学 (Psychologie)」の関係について以下のように述べる。

「……」しかし、論理学とわれわれの語っている心理学のかの部分より近い教説が、他にあるだろうか。より深めていくとする論理学はどれも、心理学の領分のうちへと掘り下げていくものであり、論理学が何ゆえある時代に、実りの乏しく、萎縮したものとなったかといえば、それは論理学が自身の根を心理学の地盤のうちに下ろさず、そこから生命の滋養を吸い取らなかったからに他ならないのである。

そして論理学が心理学から諸原理を受け取るとすれば、心理学は論理学のうちに終わる。両者の学問の関係は、アリストテレスが注記しているように、医術と、近代が生物学あるいは生理学と名づけたあの自然科学の部分との間の関係にまったく類似している。自然研究者の課題には、健康と病気についての教説の最初の諸原理を認識することが属し、

それゆえにアリストテレスが言うように、たいていの自然研究者や、また医者たちのうちでより学問的な意味で自分たちの技術を営んでいる人々は、ある人たちは医療の領分を自分の診察で終わらせてしまい、他の人々は自然科学から出して医療の教説を発展させている、ということとをわれわれは見るのである。(Brentano 1867: 1-2)

ブレンターノは『感覚と感覚されるものについて』のアリストテレスの議論(Sens. I, 436a17-b1)に拠りつゝ(Brentano 1867: 2-3)、論理学と心理学の関係を医療と自然科学の関係から説明している。それぞれにおいて後者が前者に原理を提供するということが述べられているので、前者のみで満足する人々はその基礎となる事柄を本当の意味で知っていないということが意図されているのだろう。

以上のブレンターノの解釈からは、心理学がある意味で論理学を基礎づけるということになる。⁽¹⁴⁾仮にこれをアリストテレス自身の見解であるとしよう。この見解は、『魂について』で示される学問の方法論が『分析論後書』に代表される論理学的知見を明らかに前提していることを踏まえれば(I.1, 402b16-403a2, II.2, 413a11-20, cf. 中畑 2014, 71, n. 3)次のような構造を示す。すなわちそれは、論理学的知見を持つていなければ心理学的考察を行うことができず、心理学的考察の結果として獲得される知見が論理学を基礎づける、という構造である。アリストテレスのおなじみの例を用いて、論理学を「われわれに對してより先である」ものあるいは「明晰に理解されてはいないが比較的はつきりと現れている事柄」と、心理学を「自然本性においてより先である」ものあるいは「明晰であり理に即していつそう認識される事柄」と表現することもできるだろう(cf. APo. I.2, 71b33-72a5, II.2, 413a11-13)。そうすると、心理学を自然本性的に先立たせている何かが存在していることになる。それは何だろうか。

たとえば、アリストテレスは『魂について』冒頭で「知ることとは、われわれの考えでは、美しくまた高貴なことの一つである」と述べたうえで、「魂の探究を最上位の知のうちに位置づけるのは、理にかなったことであろう」と主張する

(I, 402a1-4)。魂が最も高貴なものであるから、学問の特性として心理学が論理学に自然本性的に先立つということは可能であるように思われる。しかし今私たちが従っているのは、心理学が論理学を「基礎づける」というブレンターノの強い要請であった。この要請を満たすものとして、いかなるものが考えられるだろうか。

ここで、基礎づけられる方の「論理学」の議論に目を転じてみよう。『分析論後書』のアリストテレスにとって、知性とは論証の第一原理を把握している「状態」であった (cf. *APo* II 19, 99b17-19, 100b5-17)。彼の枠組みでは論証によって知識が獲得されるため、知性は知識の原理でもある。この事情は、以下の二つのテキストが端的に示してくれる。

「……」推論においては一つである無中項の前提が、そして論証と知識においては知性が端的なこと（端緒）である。
(*APo*, I 23, 84b39-85a1)

「……」こうして、知識より他には、いかなる種類の常に真である性向をもわれわれは持っていないとすれば、知性が知識の原理であることになるだろう。こうして、知性は原理の原理であることになろうが、知識は全体として「われわれが知識を持ちうる」事柄の全体に対して同様に原理であるという関係にある。(*APo*, II 19, 100b14-17)

このように論証と知識は知性が基礎づけるが、逆は成り立たない。『分析論後書』を含む『分析論』全体のテーマは論証的知識であるため (*APo*, I 1, 24a10-11)、「論理学」という枠組みの中ではこのような議論で終わっても問題ないだろう。しかしわれわれは、知性がなぜ論証的知識を基礎づけられるのかという問いや、知性をさらに基礎づけるものは何かという問いを提示することができる。ただしそれを問うのは、「論理学」の役割ではない。¹⁵⁾

そこで、論理学よりも高貴なものである「心理学」（魂についての学問）の出番である。そして今考察されているのは知性

と基礎づけの問題だったのだから、その学問のうちでも知性論に関わる部分を取りわけ参照する必要がある。つまり、「論理学」についての知見は『魂について』の探究方法として必要とされるものだが、その書における知性論の重要な役割を認識するためにも重要なものである。それゆえ、アリストテレス哲学のカリキュラムとしては、論理学的著作の中でも少なくとも『分析論後書』（あるいは『分析論』全体）については、『魂について』以前に学習しておく必要があるだろう。

五. ヌース・ポイエーティコスの役割

前節では、『魂について』に加えて『分析論後書』の議論を参照することで、心理学が論理学を基礎づけるというブレンターノの見解の一定の妥当性を示した。本節では、このような枠組みのもとでヌース・ポイエーティコスが果たす役割を示す。

さて、前節で言及されていた知性と基礎づけの問題へと戻ろう。先に参照したように、ブレンターノはヌース・ポイエーティコスが感性的部分に作用することで、表象内容を知性的部分へと惹きつける働きを持つと考えていた。しかし、おそらくヌース・ポイエーティコスは感性的部分に作用する一方で、ブレンターノが述べるところのヌース・デユナメイにも（ブレンターノの理解と異なり）間接的にはなく直接的に作用する。というのも、論証的知識の原理としての知性には、単に論証の第一原理を把握しているだけでなく、それを当該学問の第一原理として把握するという能動性が求められるからである（cf. 酒井 2020: 185-194）。本質や原理が成立するのは知性、すなわちヌース・デユナメイの中だけである。それは、アリストテレスの「形相の場所」という表現から明らかだ（III 4, 429a27-29）。ただ、そういったものを「結合」したり（III 6, 430a26-46）、特定の学問の原理として措定したりという高次の知性認識は、それらを含んでいるヌース・デユナメイにヌース・ポイエーティコスが作用することによって成り立つのではないか。というのも、ヌース・デユナメイには「可能的であ

る」ということ以外には、いかなる本性であつてもいさゝか属する」(III 4, 429a21-22)、表象内容は「知を行使して観想するとき」伴われるものにすぎないのであれば(III 8, 432a8-9, cf. III 7, 431a16-17)、それらとは別の場所で知性認識することの能動性が担保されねばならないように思われるからである。つまり、ヌース・デユナメイは概念形成や概念把握に関わるが、ヌース・ポイエーティコスはその概念の使用に主に関わるのではないだろうか(これらはいずれも知性認識活動の中に含まれるものである)⁽¹⁶⁾。ヌース・ポイエーティコスについては、第一可能態の第二可能態ないし第一現実態への移行(いつでもその能力を使用できる状態への移行)と、第二可能態ないし第一現実態の第二現実態への移行(能力を実際に行使する状態への移行)のいずれに関わっているのかということが古来問題となってきた(cf. Kosman 1995)。本節における私の考察は、この両者のうちの後者を論じるものである。

考察を進めるため、第三巻第五章の以下のテキストを再度参照しよう。

また、活動実現状態にある知識は、その対象となる事物・事象と同一である。ただし可能状態にある知識は、一個人においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない。またこの知性は、あるときに知性認識し、あるときには知性認識しない、ということはない。(III 5, 430a19-22)

このテキストは後世の付け足しであると考えられることが多い(Shields 2016: 324-325)。実際、知性について論じているときに突如として別の認識状態である知識の話題に切り替わっており、解釈が難しい箇所である。しかし、ここでの「活動実現状態にある知識」を観想活動における知識と理解し、概念形成と概念使用の観点から捉えれば、このテキストはうまく読むことができる。そのため、第三巻第四章末尾の次のテキストも参照しよう。

なぜなら、素材を伴わないもの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものは同一だからである。実際に、観想的知識（ $\tau\acute{\iota}\nu\epsilon\iota\sigma\tau\iota\kappa\eta\ \eta\ \theta\epsilon\omega\rho\eta\tau\iota\kappa\eta$ ）とそのような仕方では知られるものとは同一である（ただし、知性がつねに知性認識している状態にあるのではないことの原因については、後に考察しなければならぬ）。（III 4, 430a3-5）

先の引用箇所は、明らかにこの箇所に対応し、これを説明するものである。ここでは、知性認識する主体と知性認識される対象の同一性が語られ、それが観想的知識とその対象の同一性という例で説明されている。そして、知性認識しているものないし観想的知識が対象と同一であるためには、それらが可能態であるのではなく現実態であることが必要だと先の引用箇所では述べられているのである。その箇所がヌース・ポイエーティコスを説明する文脈であることを踏まえれば、概念や知識を単に所有している状態ではなく、それを実際に使用することにヌース・ポイエーティコスが関わっていることが理解されるだろう。¹⁷

テキスト解釈を続けよう。第三巻第四章からの引用では「知性がつねに知性認識している状態にあるのではない」と注意され、その「原因」が「後に考察」されると語られる。¹⁸ 前段落における私の想定が妥当なものであれば、その理由も先の第三巻第五章からの引用箇所ですべて示されていると予測できるだろう。そこで注目すべきは、個人における可能態としての知識は同じ人の現実態としての知識に時間的に先立つものの、「全体としては時間の上でさえより先なるものではない」という文章である。個人的観点ではなく全体的観点からは、可能態としての知識に先立つ何かが必要とされる。つまり、現実態としての知識を用いて実際に観想活動を行うためには、可能態としての知識に先立つ何かが必要である。

その「何か」が、「その本質的あり方において活動実現状態にある」（III 5, 430a18）ヌース・ポイエーティコスのことであるように思われる。つまり、次のようなことがここでは想定されている。第三巻第四章で「知性がつねに知性認識している状態にあるのではない」と述べられるのは、知性認識が作用を受けて成立することを踏まえれば、作用を受けておらず可能

態のときには知性認識が成立していないことを意味する。他方で、ヌース・ポイエーティコスとは「その本質的あり方において活動実現状態にある」のだから、それが作用しているときには、常に知性認識が成立しているだろう。そうすると、第三巻第五章における「またこの知性は、あるときに知性認識し、あるときには知性認識しない、ということはない」という言明は、ヌース・ポイエーティコスが作用するときの知性について述べているのではないか。つまり、第三巻第四章でも第三巻第五章でも、問題となっているそれぞれのテクストの主語である「知性」とは、知性認識の主体としての知性であり、ヌース・デュナメイかヌース・ポイエーティコスのいずれかというわけではない。¹⁹それは、どちらの章でも問題となっている箇所直前で、知性そのものではなく知性活動の例としての知識が言及されており、可能態としての知識と現実態としての知識の関係が意識されていることから示唆される。つまり、このような知識を対象とする知性認識活動の主体たる知性そのものが想定されているのである。また、第三巻第四章の段階では、成立した知性認識とヌース・デュナメイのこのみが見えられ、その知性認識を成立させるために必要なものについての言及は慎重に避けられていたことに注意する必要がある。第三巻第五章に至り、その成立要件であるヌース・ポイエーティコスが登場したとき、それがなくときには知性認識が成立していないということが明らかにになり、それを踏まえたかたちでの「知性」と「知性認識」という言葉の使用が明らかになったのである。

ただし、以上のような解釈には次のような反論が想定される。アリストテレスは感覚と知性を類比的に捉えており、その観点からは、感覚が感覚されるもの（感覚対象）から作用を受けて成立するように、知性の場合も知性認識されるもの（知性対象）から作用を受けるということになる。しかし、知性対象という役割を担えるのは可知的表象であり、ヌース・ポイエーティコスは作用すれども知性対象たりえないのではないだろうか。この反論に応答するには、現実態としての知性と知性対象は同一であるというアリストテレスの主張を参照する必要がある（cf. III 7, 431b17）。第三巻第四章～第五章で知識と知識対象が同一であるという議論や知性の自己認識が言及されるのは、このような知性理解を導くための伏線であろう。

それゆえ、作用する知性が作用することは知性対象が作用することと同義となる。このような特殊な経路を辿るために、作用する知性には常に現実態であるという特徴が付与されたのだろう。

このように理解すれば、ヌース・ポイエーティコスそのものに「常に知性認識する」という神以外には適用が難しい規定を付与せずともすむ。ただしこれは、『魂について』第三巻第五章やヌース・ポイエーティコスについての議論から神性を追放することを意味しない。というのも、以上の解釈が正しいとしても、ヌース・ポイエーティコスに「その本質的あり方において活動実現状態にある」(τῆ ὁμοῖα ὁν ἐνέργειᾳ)や「不死であり永遠である」(ἀθάνατον καὶ αἰδιόν)という規定が残るのは事実だからである(III.5.430a18, 23)。アリストテレスの想定する不動の動者ないし神の特徴と一致するこれらの規定こそ、心理学が論理学の原理たりえる理由であると思われる。つまり、『魂について』が第一原理を代表とする様々な事柄の認識の構造を提供するからこそ、『分析論後書』で展開される「論理学」の原理として機能できるというだけではない。われわれの認識を成立させると言われるヌース・ポイエーティコスが、可滅的な他の事柄と異なって「不死であり永遠である」うえに「その本質的あり方において活動実現状態にある」からこそ、われわれの認識やそれに基づく「論理学」は実行できる。「これ (τοῦτο)」「作用する知性」なくしては何も知性認識することはないのである」(III.5.430a25)。

ヌース・ポイエーティコスは、「魂のうちにもそのような区別が成立している」(III.5.430a13-14)と述べられることから人間の魂に含まれるものであるが、先に見たように神性を併せ持つ半神半人的なものであり、その意味で個人を超えて「全体」に関わる。そしてそれは、その神性のゆえに、常に現実態であり続けることで諸学問を代表とする人間の認識的営みを認識論的のみならず存在論的にも基礎づけている⁽²¹⁾。これが、本稿の提示するヌース・ポイエーティコス理解である。

おわりに

アリストテレスがヌース・ポイエーティコスが必要としたのには二つの理由がある。第一に、知性論に関する先行哲学者であるアナクサゴラスの主張を救い、それを乗り越えるため。第二に、論理学の基礎としての心理学をさらに基礎づけるため。これからこそ、ヌース・ポイエーティコスという問題が生じた文脈なのである。

さて、人間性と神性の両者をそこに認める本稿のヌース・ポイエーティコス理解については、それがアリストテレスの認識論を説明するための「機械仕掛けの神」のようなものになっているのではないかという批判が予想される。この批判の核にあるのは、「重要などころで神に頼るのか」という疑念だろう。しかし、彼の哲学を理解するうえでは、神性が影響する余地をまったく認めない方が問題である。本邦の二人の研究者の発言を参照しよう。

「……」しかし、アリストテレスの哲学が確かに「神」を志向しているという事実は動かない。実体論がそうであった。紆余曲折を経て、純粹な「本質・形相」に辿りつくその探求は、明らかに、純粹な現実態（純粹形相）に連なるものである。魂論がそうであった。生の階層を漸次的に上昇していくその過程は、どんなに少なく見積もっても、人間的生のはるか先を見据えていた。アリストテレス哲学のこのような「ハードな部分」を切り捨てる代償は、計り知れない。[……]（金子 2011: 286-287）

おそらくアリストテレスが示唆しているのは、それぞれの人間の思考や学びに、それを可能とする条件として個人を超えた何かはたらいっているということであろう。そのような超越的条件は、アリストテレスにとってはもしかすると

「神」という言葉で表現されるものかもしれない。しかしそれをどのように考え名づけるかを別としても、人間がものを考える思考するためには、個人とその身体の（現代ならとりわけ脳の）能力を超えるものが存在することが必要であろう。
[……]（中畑 2014: 487）

このような主張は、ブレンターノがすぐれた哲学者にして解釈者でもあることを再確認させるものである。彼がヌース・ポイエーティコスを無意識と理解したのは、中畑が述べるところの「個人を超えた何か」を想定していたからだろう。²²⁾そしてブレンターノは、ヌース・ポイエーティコスそのものを神と同一視することを拒否したが、神というアリストテレス哲学の「ハードな部分」から逃げることもなかった。それゆえ、ブレンターノの解釈を仮に受け入れられないとしても、これまでの考察を経てきたわれわれはその基本的姿勢を共有し、それを適切に評価することができる。そしてブレンターノにしろわれわれにしろ、ヌース・ポイエーティコスとは、それさえあればすべてが大団円になるようなものではなく、哲学的考察を進めていった結果としてどうしても要請されるのだと主張するのである。

註

（１） 本稿は、二〇二四年九月二十八日に開催された令和六年度九州大学哲学会のシンポジウム「ヌース・ポイエーティコスとの向き合い方」〔科学研究費・若手研究「『魂について』を核とするアリストテレス認識論の再構成」（研究代表者・酒井健太郎、課題番号：21K12837との共催）〕における、同タイトルの発表原稿に加筆修正をしたものである。本シンポジウムで提題者となっていた村田憲郎氏（東海大学）、司会をしていた村田剛先生（九州大学）をはじめとして、当日の議論に参加していただいた方々に御礼申し上げる。

（２） なお、以下で論じられる「知性」とは、第三巻第四章（第八章の主題である「観想にかかわる知性」）のことであり、実践にか

わる知性ではなす (cf. II 3, 415a11-12, 中畑 2014: 79, n. 11)。

- (3) 「ブレンターノの解釈を採用するか否かにかかわらず、この一つの短いテキストが引き起こしている複雑さを、彼の議論がどのくらいうまく説明しているかを正しく理解することは有益である」 (Shields 2016: 313-314)。

- (4) アリストテレスの著作からの引用と参照については、巻、章、ベッカー版のページ数と行数を、[S] による著作名の略号を加えて指示する (『魂について』のみ、著作名の略号を省略している)。引用の際には参考文献に挙げている邦訳を参照したが、OGT版を底本として訳文や訳語を断りなく変更した箇所も多い。また、() は原語を、[] は筆者による補足ないし説明を示す。以下同様。

- (5) 「アリストテレスの心理学」の訳については、この著作の読書会にて使用する目的で村田憲郎氏が作成されたものを御本人の許可を得たうえで用いている。ただし、ドイツ語原文と照合し、一部の訳や表記を断らずに改めた箇所も存在する。(なお、本稿を執筆するにあたって、村田氏はもちろんのこと、読書会に参加されていた池田真治氏 (富山大学) からも様々な有益な示唆を頂戴した。この場を借りて御礼申し上げる。)

- (6) ブレンターノは、ヌース・ポイエーティコスと同じくヌース・デユナメイも不滅なものだと考えていた。「第二に、この能力は魂をこめられた身体能力ではなく、ひとえに魂の能力であり、それゆえ思考内容 (Gedanke) を受け取る知性が、つまりヌース・デユナメイが、精神的であり不滅であるということである」 (Brentano 1867: 143)。

- (7) それでは、『魂について』第三巻第五章との整合性が仮に取れば、ヌース・ポイエーティコスが無意識であるというブレンターノの解釈は妥当なものとなるのだろうか。本稿ではその可能性を詳細に検討することはできないが、私は悲観的な見通しを持っている。その見通しの一端を示すとすれば次のようになる。ヌース・ポイエーティコスを無意識能力として導出する根拠の一つとして、(アリストテレス的) 世界が諸々の実体間の「無意識的な因果関係」から成り立っているということをブレンターノは取り上げる (Brentano 1867: 69-70)。しかし、そのような主張をたとえば『魂について』のテキストから裏付けることは難しい。そうであれば、世界が無意識的な因果関係から成立していることを根拠として、魂の精神的部分においても無意識の作用を担保しなければならぬと主張することも擁護できないだろう。

- (8) この箇所は本来、知性が自己認識するとすれば、認識する側と認識される側に共通のものがなければならず、それはアナクサゴ

- ラスによる「他のものと共通なものを持たない」という知性の規定と矛盾する、という議論に関係する。アリストテレスはこの矛盾を解消するために、「素材を伴わないもの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものとは同一」であると主張することになる (III.4, 430a3-4)。
- (9) ヌース・ポイエーティコスの常に現実態であるという特徴については、アナクサゴラスの以下の見解も影響しているかもしれない。「しかし、知性は常にあり (καί ἐστιν)、いまも歴然として、他のすべてのものがあるそのところに、それはある——まわりを取り囲む多なるもの(いまだ未分離なもの)の内にも、(それから)分離してきたものの内にも、またすでに分離しおえたものの内にも」(DK 59B14)。ただし LMD38では異なった校訂が採用されており、そちらを採用した場合には常にあるという性質を知性に帰属させることはできない。なお、アナクサゴラスの断片については、内山 et al. 1997 の訳を参照した。
- (10) アリストテレスはアナクサゴラスに高い評価を与えている。「だから、或る人「アナクサゴラス」が知性を動物のうちに存するように自然のうちにも内在するとみて、知性をこの世界のすべての秩序と配列の原因であると言ったとき、この人のみが目ざめた人で、これにくらべるとこれまでの人々はまるでたわごとを言っていたものかともみえたほどである」(Metaph. A.3, 984b15-18)。
- (11) 「アナクサゴラスの知性についてのこのような特徴づけはアリストテレス自身の概念的枠組みにもとづく」(中畑 2014: 33, n. 35)。
- (12) アリストテレス解釈におけるアナクサゴラスの重要性については、Kosman 1995 や Carter 2019 を参照。
- (13) そしてさらに、作用を受けるものだという感覚や知性の特徴も、アリストテレスが先行哲学者たちの見解から引き出してきたものである (cf. I.5, 410a25-26)。そのため、彼はアナクサゴラスと他の先行哲学者たちの見解を調停させるという目的も有しているように思われる。
- (14) プレンタノーは、ヌース・ポイエーティコスの考察という心理学的探究を終えたうえで、それがアリストテレスの論理学(『分析論後書』の最終章)の議論とも一致する、という考察の手順を踏む (Brentano 1867: 211-215)。
- (15) プレンタノーは「……」論理学的な書物のどこでも(同じことは『形而上学』にも当てはまる)、ヌース・ポイエーティコスが直接に論じられているところはないからである」と述べる (Brentano 1867: 39)。「分析論後書」では知性認識活動の内実が示されておらず、ヌース・ポイエーティコスを伴うその分析は『魂について』で行われる。

- (16) プレンターノは、『分析論後書』第二卷第十九章で行われていることが帰納を通じた概念形成ではないと主張する (Brentano 1867: 213-216)。私はこの点に関する彼の解釈に賛同する。私の解釈では、当該箇所で行われていることは教育と学習による概念「把握」である (酒井 2021: 19-20)。また、「『魂について』第三卷第五章が概念獲得にまったく関心を持っていない」と主張する研究者もいる (Medin 1988: 176-177)。
- (17) つまり、私はここで Kosman 1995: 355 に賛同し、「観想」が知性の第二現実態に関わると解釈している。
- (18) 私と異なり、Theiler 1959: 142 はその原因を示すテキストの一つとして、III, 5, 430a24 を参照する。
- (19) 実際に『魂について』第三卷第四章では知性認識の主語として「知性」がしばしば用いられている (e.g. III, 4, 429a22-24, 429b3-4)。また、私のこの解釈は、プレンスターノが γ (神的ヌース) と理解している箇所を δ (魂のヌースの部分) と理解するものである。その意味で私の解釈は、プレンスターノの解釈にその着想を得ている。
- (20) 『形而上学』Δ 巻において、不動の動者ないし神について説明していると思われる箇所です。「その実体「本質」が現実態 (ἐν οὐσία ἐνέργεια)」(Metaph. A6, 1071b20) とか「永遠の生命 (ζωὴ ἰ. ἀίτιος)」(Metaph. A7, 1072b28) と述べられている。これらのテキストのうちの前者の参照も含め、Kosman 1995: 353 を参照。ただし私は、神や「意識 (consciousness)」を δ である Kosman のヌース・ポイエーティコス解釈には賛同しない。
- (21) Burnyeat 2008: 38 は『魂について』第三卷第五章を「第一哲学、神学、形而上学」と特徴づける。また、私のここでの主張に関連するものとして、Burnyeat 2008: 40-41 を参照。
- (22) 村田憲郎氏の示唆による。

参考文献

- Brentano, F. (1867) *Die Psychologie des Aristoteles, insbesondere seine Lehre vom Nous Poietikos*, Verlag von Franz Kirchheim.
- Burnyeat, M. F. (2008) *Aristotle's Divine Intellect*, Marquette University Press.

- Carter, J. W. (2019) 'How Aristotle Changes Anaxagoras's Mind,' *Apeiron* 52 (1), pp. 1–28.
- Diels, H. and W. Kranz (1952) *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6th ed., vol. 2, Weidmann. [参照したのは第六版の原本復刻版である一九九六年刊行の⁶⁶]
- Hamlyn, D. W. (1993) *Aristotle De Anima. Books II and III, with Passages from Book I*, (2nd ed. with a Report on Recent Work and a Revised Bibliography by C. Shields), Oxford University Press.
- Hicks, R. D. (1907) *Aristotle De Anima with Translation, Introduction and Notes*, Cambridge University Press.
- 出窪訳註 (1966) 『形而上学』 アリストテレス全集第十二巻⁶⁷ 岩波書店
- Jaeger, W. (1957) *Aristotelis Metaphysica*, Oxford University Press.
- 金子善彦 (2011) 「アリストテレス」神崎繁⁶⁸ 熊野純彦⁶⁹ 鈴木泉 編『西洋哲学史 I——「ある」の衝撃からはじめよう』講談社⁷⁰ pp. 255–315
- Kosman, L. A. (1995) 'What does the Maker Mind Make?', in Nussbaum and Rorty, pp. 343–358.
- Laks, A. and G. W. Most (2016) *Early Greek Philosophy*, vol. VI, Harvard University Press.
- 松浦和也 (2019) 「知性の離存性について」『ギリシア哲学セミナー論集』XVI, pp. 33–48.
- 中畑正志訳註 (2014) 『魂について』新版アリストテレス全集第七巻⁷¹ 岩波書店
- Nussbaum, M. C. and A. O. Rorty eds. (1995) *Essays on Aristotle's De Anima*, Oxford University Press.
- Polansky, R. (2007) *Aristotle's De Anima*, Cambridge University Press.
- Ross, W. D. (1924) *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, vol. 2, Oxford University Press.
- (1956) *Aristotelis De Anima*, Oxford University Press.
- (1961) *Aristotle De Anima*, Oxford University Press.
- and L. Mino-Paluello (1964) *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, Oxford University Press.
- 酒井健太郎 (2020) 『アリストテレスの知識論——「分析論後書」の統一的解釈の試み』九州大学出版会
- (2021) 「アリストテレスの抽象理論の射程」池田真治編著『抽象の理論をめぐる哲学史——古代から近代まで——』（「抽象

と概念形成の哲学史」研究会・研究報告論集」、pp. 1-29.

Shields, C. (2016) *Aristotle De Anima*, Oxford University Press.

高橋久一郎訳註 (2014) 『分析論後書』新版アリストテレス全集第二巻、岩波書店

Theiler, W. (1959) *Aristoteles, Über die Seele*, Akademie Verlag.

内山勝利 et al. 訳 (1997) 『ソクラテス以前哲学者断片集 第三分冊』岩波書店

Medin, M. V. (1988) *Mind and Imagination in Aristotle*, Yale University Press.

本研究は、JSPS 科研費 JP21K12837 の助成を受けたものです。

(九州国際大学法学部法律学科・准教授)